

水産海洋研究会設立の記録

(水産海洋研究会報第1号(1962年6月)から抜粋)

1. 水産海洋研究会(The Japanese Society of Fisheries Oceanography)の設立の趣旨

目的

有用水産生物を中心とする海洋生物の環境の現状を把握し、さらに環境と生物の相互関係の究明、環境の改善と造成等により産業を発展させていくためには、水産、海洋生物、理工学等各分野にわたって関心の深い人々の共同討議を行い、総合的な研究を推進させる必要がある。

本研究会は以上のような趣旨に賛同する人々によって構成し、この方面の研究発展に寄与することを目的とする。

事業

談話会およびシンポジウムを開催し、必要に応じて会報を出して、会員に配布する

会費

当分の間年額200円とする。

組織

常置委員を東京及び地方におき相互の連絡協議活動に便ならしめ事業の推進にあたる。常置委員の選定、任期等について別に協議して定める。

事務局は暫定的には東京水産大学海洋学教室におく

事務局所在 東京都港区芝海岸通り6丁目

東京水産大学海洋学教室

電話(451)9291

2. 水産海洋研究会発足までの経過報告

(イ) 概要

かねて海洋学と水産生物学、漁業学との間に横たわる水産生物環境関係を話題として討論する会合が希望せられていたので、昭和27年4月7日(9-17時)、日本海洋学会と日本水産学会の共催で「水産生物環境関係研究懇談会」第1回を年会総会参集を企図して開いた(日本海洋学会誌8巻2号85-87頁参照)。この時は第1部門(海洋と生物、漁況関係)、第2部門(増殖関係と海洋)、第3部門(漁労と海洋関係)、第4部門(海洋測器関係)につき綜説討論を終わり、今後について協議し、1)今回のような会の成立したことを認める。2)合同常置委員会につき両学会から連絡委員を出して協議する。3)年会、地方大会の時シンポジウムを行い討論協議する、などが決定した。27年9月27日第2回が北大水産(函館)で水産学会大会にあたり開かれ「海洋生物環境研究法」を主題とした。第3回は昭和28年4月7日「生産力」をテーマに東海水研で開かれ、第4

回昭和29年4月7日生物環境シンポジウム「海況と漁況の関係」(東海水研)、第5回昭和30年4月6日「海洋生物の異常繁殖と環境の関係」(水研)、第6回昭和31年4月1日「ミクロ水産海洋学の問題」(東海水研)、第7回昭和32年4月7日「水産資源変動と環境」(東海水研)、第8回昭和33年4月5日「生物環境の周期性」(東海水研)、第9回昭和34年4月5日「密植と環境」(東海水研)、第10回昭和35年4月7日「黒潮縁辺の冷水塊」(水研)、第11回昭和36年4月7日「新海洋調査の測器方法」(水大)と行い、この会合で仮称水産生物環境研究会の提案討議があった。

第12回昭和37年4月6日「水産海洋学または漁況海況調査のあり方と問題点」(水大)につき行って、前年の提案の結末として会発足につき両学会選出の6人委員(宇田道隆、斎藤泰一、丸茂隆三、平野敏行、中井甚二郎、松江吉行)に一任せられていたので、「水産海洋研究会」発足の知らせとして出した原案が可決せられ会費は100-300円程度で本年から実行に踏み出すこととなったのである。(当日の協議の抜粋を本校の後に付記する)その産婆役と初期運営を6人幹事会が常置委員として引き続き担当することとなった。さらに5月1日の幹事会で元田茂(函館)、辻田時美(長崎)を地方の常置委員になっていただくことに決り、両氏の了解を得た。また宇田道隆を代表委員とすることに決定した。日本海洋学会評議員会(5月)には宇田委員が、また日本水産学会理事会(5月)には松江委員が報告を行った。秋のシンポジウムは11月4日長崎で大会に当り開催される予定である。会報は本年2冊刊行を予定し、取りあえず当分会費200円(年)とした。支部は長崎(辻田時美氏ら)、函館(元田茂氏ら)など各地に続々で活動を始めようになったので、設立については事務局へご連絡ください。連絡責任者名と会員名など一しょにお願いします。

(ロ) 水産海洋研究会発足についての協議抜粋

昭和37年4月6日 於東京水産大学、生物環境シンポジウム

座長 黒木敏郎

宇田委員から研究会発足についての趣旨説明があり、主として次のような質疑応答、協議が行われた。

○研究会と学会との関係について(元田氏から質問)

独立した学会ではなく、両学会の中間的存在で、両学会員以外の人も入ってもらえるようにしたい。(宇田)

○研究会の研究内容について

海洋の全energyまで含めた Production Oceanography とい

うようなものにしてはどうかという意見（元田）も出たが、今後発展次第では、その必要が起きるかもしれないが、水産と海洋とを結びつけるという意味、また、業界の参加を期待していることから、なるべくわかり易く、Fisheries Oceanography とすることにした。

○会費について

いろいろの意見が出たが、100-300円として、委員にまかすということになった。なお、元田氏から、寄附は大いにこれ、そのためには規定にもれという意見が出た。

○研究会の目的・事業・会費・組織などについて

全面的に賛成との意見が多く、具体的には、シンポジウム委員6人にまかすということになった。（栗田、松平、渡辺）

○常置委員について

さしあたって常置委員を置く必要があるが、これについては現在の委員で、その選定、任期などについて考えることになった。即ち、東京、および地方に常置委員を置くが、委員は、申込者の中から委員がきめ、秋の学会に発表する。

○次のシンポジウムについて

秋の長崎大で開かれる水産学会、海洋学会の際、開く、そのテーマなどについては辻田氏が引き受けた。

（宇田道隆、平野敏行）

3. 会員参考意見（申込書に付記されたもの）

○年2回（シンポジウムのアブストラクトおよび文献紹介程度）

○地方在任者のために会報（ガリ版刷り程度のもので結構）どしどし発行希望

○諸種会合に参加し難い地方在住の会員のために、各種会議の記録等を可及的配布希望

○海洋観測が、いかなる「生物学的根拠」に基づいてなされているか、をうかがいたし

○(1) 差当年1回会報刊行 (2) 業者にも入会を呼びかける

○会を発展させるため広範の人を包含することが必要。その上会の運営の妙を得るには、各分野の人が参画できるようにすること。あまり固定した範囲で発足しない方がよい。

○業界との結びつきを主張する意見がかなり多かったように思う。業界との結びつきは大へん結構、しかし内容はできるだけわかり易く実際的なものであり、業界の人もフランクにしゃべれる機関であってほしい。

○専門分科会を置き、隔月位に討議すること、他専門分野の人たちにも働きかけること。

4. 入会申し込み数（昭和37年6月1日）

東京近在	47名	} 101名
九州	21名	
北海道	14名	
東北	6名	
関西	} 13名	
北陸		

5. 「水産海洋学（漁況海況調査）のあり方」シンポジウム

- (1) 北洋沿岸ブリストル湾の底魚の分布と海洋学的環境
小藤英登（北大水）
- (2) プランクトンから見た北洋水産調査
元田 茂（北大水）
- (3) サケ・マス漁況から見た水産海洋調査
田口喜三郎（日魯漁業K.K）
- (4) 北洋の水産海洋調査
平野敏行（東海水研）
- (5) 水産海洋学の概念とイワシ類から見た水産海洋調査
中井甚二郎（東海水研）
- (6) 水産海洋調査あるいは漁況調査の問題点とあり方
ブリ定置網漁況と海況との関係よりみて
栗田 晋（東海水研）
- (7) 日本海漁況よりみた海洋調査
下村敏正（日水研）
- (8) 保存成分の分布変動と西日本近海・東支那海のアジ・サバ漁場形成と海洋条件の調査
辻田時美（西水研）
- (9) 東北海区のサンマ・カツオ・マグロ漁場に関する海洋調査
木村喜之助（東北水研）
- (10) Water Type の指標としてのマグロ類の分布
山中 一（南海水研）
- (11) 米国の水産海洋学研究近状
新崎盛敏（東大水産）
- (12) 海洋物理から見た水産海洋学について
吉田耕造（東大理）
- (13) 一般水産海洋学
宇田道隆（東水大）

6. 事務局よりのお知らせ

- イ) 水産海洋研究会入会申込書
- ロ) 本年度分会費（200円）事務局あて御納め下さい。各地でまとめていただけると好都合です。
- ハ) 本年度会報は2冊の予定（No.1 6月、No.2 3月）
- ニ) 秋季シンポジウムは11月5日長崎で開かれる予定（西海区水研）辻田時美氏を中心に準備されています。
- ホ) 会報No.2には「会員名簿」をつけてお送りします。
- ヘ) 鯨漁場（6月15日）等座談会があり、記事は会報に乗せる予定です。今後の座談会についてご希望があればおよせ下さい。

- (ト) 水産海洋学アンケート (宇田とりまとめ中) は次号にご報告します。日本国内および東南アジア諸国共。
- (チ) 水産海洋学のワーキンググループ (SCOR) 活動状態も次号に。
- (リ) 来年度春季大会に希望されるシンポジウム・テーマその他秋季大会に相談してほしい議事があったならば事務局まで御申し越し下さい。
- (ヌ) 本会報内容や本会運営に関するご意見をどしどしお寄せ下さい。特に漁業の実地に当られる方々のご意見を多く出していただくことを歓迎します。

4月6日のシンポジウム当日本会発足のお知らせをして、会員の申し込みを受けているが、日本海洋学会、日本水産学会への報告説明が5月になり、春季シンポジウム講演要旨が集まったのが5月下旬で、6月5日松江、中井、丸茂、斎藤、平野、宇田で編集会議 (学士会館)、やっと会報第1号が生まれることになった。会員も続々増え、連絡活動もでき発展することであろう。現在鯨漁場 (6月15日) についての会合をはじめ未定ではあるが座談会として沿岸、北洋、マグロ、海底、測器等の開催の「アイデヤ」が出されてみたり、続々長崎、函館その他各地支部設立の動きも始まり、秋の大会も長崎で西海漁業関係シンポジウムとともに行うよう現地で準備されている。

気楽にフランクに漁業現場の方々と研究者が話し合っ生きて研究を力強く進めていきたい。外国との接触、連絡も密にしていきたい。鯨の座談会はできれば毎年鯨研と連合で、その他の座談会も各関係者及び組織と連合で進めたい。測器の問題は特に大せつである。

ご参考までに国内、および国外のニュースを御知らせ致します。

先般5月エクアドルで東太平洋マグロ会議に出席 (中村博士) にひきつづき、米国ラホヤで7月2-14日世界鯨生物

学会議が開かれ、中村広司博士 (水産庁) らが出席される。大村秀雄博士も6月20日ごろ毎年の (ロンドン) 鯨生物学会議へ出張される。深井麟之助博士はモナコの放射能海洋学研究所 (国連) に赴任された。三宅泰雄博士はSCORの電気塩分計 (サリノメーター) と塩検基準化会議 (5月・パリ) に出張。

米国は大西洋熱帯水域マグロ漁場の徹底的一斉調査を1963年1-3月、7-9月実施計画を立てた。

ソ連は北太平洋、北大西洋1964-66年国際連合大調査計画をこれも政府間海洋学会議に提案 (日本沿海にも数本の線と定点まである)。フランス海軍はバチスカーフ (アルキメデス号) で本年5月~8月に日本海溝~千島海溝1万メートル潜航に着手した。日本では東海大学丸が5月に門出して日本初めての海洋学部のスタートを切った。水産庁8海区水研にも海洋部が誕生し、意気込んでいるし、水産土木研究協議会も生れた。時代は激しく動いている。ボンヤリしていると浦島太郎になる。アフリカ沿海の新しい海洋資源開発の大計画がユネスコでつくられ、マグロ、イワシその他の全水産資源を包括している。中南米、アフリカ等新興漁業国が爆発的躍進を昨年度から開始している。日本沿岸漁業増養殖業とその他産業との競合問題も深刻な沿岸海洋学の問題を含む (おもに高潮、津波等のための沿岸海洋研究会3月発足)。発展する水産海洋研究会がこれから実質的に大きな活動貢献を確信している。

- ① W. Von Arx: An Introduction to Physical Oceanography (1962). (Addison-Wesley Co.)
 - ② Oceanography (1961). Ed. Mary Sears (Amer. Assoc. for the Advancement of Science)
 - ③ Ilmo Hela, T. Laevastu: Fisheries Hydrography (Fishing News Ltd.)
 - ④ 水産ハンドブック (東洋経済) 新刊。
- 会へのご注文・ご希望をどしどしお申しこみ下さい。

(宇田道隆記)